ルザレス先生と英文学科

塩　尻　恭　子

Casilda E. Luzares 先生が今年の３月末日に退職なさってから早，半年以上が経った。教師，研究者，私たちの同僚，そして宣教師として，1990年４月１日からの21年間を勤めあげられ，今はフィリピンのかつての首都であるケソン・シティ (Quezon City) の新しいお家に落ち着かれた頃であろう。

先生はフィリピン群島の中央部に位置するネグロス・オリエンタル州 (Province of Negros Oriental) にあるサンタ・カタリーナ (Santa Catalina) という農村で生まれられ，ネグロス・オリエンタル国立農業高等学校 (Negros Oriental National Agricultural School) で農家の主婦になるべく教育を受けられたが，「家事，家政が苦手で成績は３番だった」とおっしゃる。先生の適性が明らかになるのは州都にあるシリマン大学 (Silliman University) に進学されてからになる。この大学はアメリカ人の手で設立されたフィリピン最古のプロテスタント系ミッション・スクールで，小学校教員になるために教育学士 (BS in Education) を取得されたが，その後同大学大学院の修士課程 (Master's course) で言語教育学を専攻され，修了後はアテネオ・デ・マニラ大学 (Ateneo de Manila University)，デ・ラ・サール大学 (De La Salle University)，フィリピン教育大学 (Philippine Normal College) 三大学共同コンソーシアムで言語学専攻博士課程に３年間在籍，1975年に言語学で博士号を取得された。修士論文は "A Proposed Remedial English Program for Silliman University" というもので，ご自身が学生として在籍する大学の英語教育への提言という，勇気ある実際的な発言であった。25才のこの若い学徒の姿勢に現在の先生を偲ばすものが既に見える気がする。博士論文は "The Morphology of Selected Cebuano Verbs:

A Case Grammar Analysis” と題して先生の母語であるセブアノ語を取り上げられた。

シリマン大学では修士課程在学中から英語学科（English Departmentの適切な訳語がわからない）で講師として教えられ，修士号取得後すぐに助教授 (assistant professor) にご昇任，そして博士号取得と共にデ・ラ・サール大学の英語学科で言語学と英語教育の助教授として着任された。この学科はその後リベラル・アーツ学部 (College of Liberal Arts) から教育学部 (College of Education) に移り，その大学院は教員養成機関であった。ローマ・カトリック教で教師の守護聖人とされる John Baptist de La Salle にちなんだ名をもつこの大学は，優れた教育と優れた教育者養成に重点をおく。先生はここで教職志望者の訓練と教員の再教育において指導的役割を果たされ，カリキュラム，シラバス，そして教授法の改良のためのワークショップやセミナーを常時開いておられた。例えばデ・ラ・サール大学発行の *TESP Journal*（第４巻，1988）に発表された “The Teaching of Writing: Problems in Syllabus Design, Materials and Methodology” の表題に，先生の強調点が鮮明に現れている。シラバス作成，教材，そして教授法――この三点を確実に改良することこそ，英語教育の質向上の確かな基盤となるだろう。

先生のご貢献は大学内に留まらず，フィリピン全土を廻って英語教育に携わる人々に教授法を伝授されるという，文字通り数分刻みの多忙な毎日であった。国際的にも活躍されて，1983年には，アジアの大学間ネットワークを通じてアジアにおける高等教育に宗派を越えた貢献を目指す United Board for Christian Higher Education in AsiaのExecutive Associate for Women’s Concernsに抜擢され，ニュー・ヨークの本部で企画のコーディネーターを３年間務められた。続く1986年から１年間，韓国のハンナム大学 (Hannam University) の客員教授として，女性学を教えられた。そして1990年４月，同志社大学文学部教授・大学院文学研究科博士課程（前期課程）教授として着任され，その二年後には博士課程（後期課程）教授になられた。

ご研究については門外漢の私には詳しいところまではわからない。ただ業績書を拝見すると，大別して言語学と英語教育学の二つの領域にまたがっておられることは理解できる。英語教育学においては，教育の現場経験から得られたデータや知見を，新たな観点や先行研究に照らして体系化し，最終的にはそれを教育現場に還元するという，理論と実践の両輪に支えられた教育学であるとお見受けする。卒業論文や修士論文の口頭試問で先生がよく口にされたのは，「あなたの発見や理論が実際の教育現場にどう役に立つのか」という問いかけであった。

実践重視の先生の姿勢は，フィリピンの国家的土壌に根ざすものであろう。フィリピンにおける英語事情は日本のそれとは非常に違う。1991年11月発行の『同志社大学英語英文学研究』54・55合併号に先生が寄稿された “English in Southeast Asia” (221-58) は，複雑多岐にわたる東南アジアの英語事情を私のように全く無知な者にも分かり易く説明してくれる。スペインを米西戦争で負かした合衆国がフィリピンを支配下におき，英語を学校での必須科目としたのが1901年１月。それから70年余は英語が唯一の教育言語であった。その後フィリピノ語 (Filipino) が加わって，今では他民族・他言語国家の結束と統一性を象徴する言語として勢いを増し，英語の重要性は逆に減じ気味になってきてはいるが，国際的水準の英語に堪能であるということは，未だ社会的，経済的，文化的エリートの徴になっており，エリートの座に這い上がるために絶対必要な条件だという。

デ・ラ・サール大学で先生が力を注がれた領域の一つにESP (English for Specific Purposes) がある。フィリピンでは，社会の上層部を除く一般の人達にとって必要な英語は，例えば科学や技術関係の文献解読とか，ビジネスのためというように，目的が絞られており，社会のこの必要に応えるのが ESP である。学習者にとってはそれを学ぶことが社会的上昇に繋がるという事情もあり，学習の動機付けは実利的，実際的だ。

デ・ラ・サール大学は高校卒業者のうちの上位２～３%が入学する大学で

あり，この人達は経済的文化的に恵まれた少数派に属し，自分たちが国を背負っているという気概をもっていた。今でもこの状況は余り変っていないだろう。先生は，英語運用能力を既に高度に有する学生たちと一体となって授業の目標達成に向けて努力するという大学教育を, 長らく経験してこられた。

この先生が日本の大学の英文学科にこられたのである。英語学習，英語教育上の違いや学生の能力や意識の違いに驚かれたのは容易に推察できる。1990年度の一般教育科目「英語F」は20人のクラスのうち4人だけパスした。学生への期待が日本の一般的な実情に合わないまま，”Teaching is a ministry, that is, a service to God.” だという信念を通された結果の厳しさであろう。

そこで，まずは学生を理解しなければと，先生の模索が始まった。その軌跡の一部が窺われる論文中，入手し易いものを少しご紹介したい。

1992年，*Doshisha Literature* 第35号に発表された “Beliefs about Language Learning: A Survey of Doshisha University Students” は，当時の英文学専攻修士課程（今の英文学・英語学専攻博士課程前期）の1990年度科目である「英語学特講II」(Second Language Development) を履修する学生達が本学英文学科の学部生対象に行った調査報告が未完成のまま残っていたので，先生がデータ分析されたものである。調査内容は，学習者が科学的根拠なしに信じ込んでいる英語学習に関する考え方や学習に対する姿勢が言語習得に影響を与えるという仮定にたって，どのような考え方や姿勢をもっているのかを掘り起こすためのもので，193人を対象になされた。19年たった現在でも，データ自体有意義であり，教員の方々には是非読んでいただきたい。そして先生の提案は，教室の内外で学生をもっと英語に晒してやること，自信のない学生が多いから自信をつけてやること, そして文法と英文和訳偏重を是正すること，系統的な調査方法の開発を進めること，学生達の実態把握を容易にする態勢作り，授業から得られるデータを多く収集できる制度的サポートが必要だということである。

1999年，*Doshisha Literature* 第42号に投稿された “Developing the English

Lexical Competence of Japanese Students: The Case of ‘komatteiru’ ” では，学生が一般に語彙増強に関心をもっていることを踏まえて，語彙力と有機的な英語運用能力を結びつける有効な教授法の必要性を説かれる。発音や文構造上の間違いよりも単語の使い方に関する間違いのほうが，外国語によるコミュニケーションを妨害するという説もあるそうだ。

この論文の発端は，初めて入試の英語採点業務（和文英訳）を経験された1991年２月にある。解答冊子から集められた間違い解答144件で「困っている」という部分を受験生がどう訳したかをデータとして記録された。その後８年間の教育経験を踏まえてこのデータを分析し，日本の英語教育の欠陥を示唆し，将来向けの提案をなさっている。日本の学生は一般に，コミュニケーションから切り離された文法と翻訳重視の教育を受けており，英語は学習されるだけで実際の場での使用に耐えないことが多く，学生は社会言語学的能力が不足しがちである。バイリンガルの辞書使用もこの傾向を増長する。英語単語を文脈から切り離して一つの日本語単語に置き換え暗記するわけであるが，単語学習は辞書の定義の暗記ではない。そこで先生の具体的提言がくる。単語は文脈の中で何度も目に触れるうちに習得されてこそ生きた英語運用能力に組み入れられるものであるから，総合的包括的インプット（“comprehensible input”）をリーディングによって与えよう。読む材料は学習者の興味を引くもので，十分なフィード･バック（例えばレヴューや要約を書かせる）を与え，ステップを踏む毎に学習者の励みになる言葉をかけようではないか，と。

英文学科に入学してくる学生達は「英語を学びたい」という漠然とした願望はもっている。私たち教員には，効果的な英語学習法を彼らに教えてやる務めがある。つまり，効果的な教授法を考案し，それを実践する必要がある。本英文学科は英語教育学を専門とする教授陣に恵まれているから，その方々の指導啓発を受けて，英語教育に集中した FD を開発することも可能である。例えば，学生は英語が読めなくなっているという言葉をよく私たちは口にするが，もし学生が語彙増強に関心をもっているのであれば，その気持ちをバ

ネにさせて，語彙習得が英語運用能力向上に繋がるように指導してやれるのではなかろうか。具体的にどういう教授法をとればいいかは，専門家のご意見が必要になる。

最後になったが，忘れてならないのは，先生は宣教師として来られたということだ。同志社は1875年に同志社英学校として出発して以来136年の長きにわたり，様々なプロテスタント教派の宣教師の方々から多大の恩恵を受けてきた。その方々を派遣してきたミッション・ボードの中でも，同志社がその援助なしには設立も存続も，そして教育機関としての質向上もできなかったほどに恩恵を受けたのが，アメリカン・ボードである。同志社大学が自ら理念として掲げるキリスト教主義教育と国際主義を実践することを可能にしたのが，このボードとの繋がりであった。アメリカン・ボードという組織と組織名は，1961年の他教派との合同で UCBWM (United Church Board for World Ministries) となった時に正式には消えた。日本には1869年から宣教活動が始まり，日本の中でも京都，すなわち同志社が，その恩恵を最大限に享受したと, 本学神学部教授の本井康博氏が言っておられる (『アメリカン･ボード200年：同志社と越後における伝度と教育活動』参照)。UCBWMも2000年に更なる合同を重ねて WCM of UCC (Wider Church Ministries of the United Church of Christ) と改称され，今に至っている。

この機会に, 戦後英文学科に宣教師として赴任された方々を表にしてみた。

Mr. Robert H. Grant	UCBWM	1947.4.1.～1974.9.16
Rev. John G. Young	UCBWM	1963.4.1~1964.1.20
Mr. Kenneth L. Jackson	UCBWM	1964.4.1.～1968.3.31
Dr. Robert N. Mooney	PCUS	1964.4.1～1967.3.18;
		1968.9.1~1970.3.31
Mr. Leonard C. Schrader	UCBWM	1969~1972.2
		(月日までの詳しい記録欠落)
Rev. Philip Williams	UCBWM	1978.4.1~1989.3.31

Dr. Casilda E. Luzares　　UCBWM　1990.4.1.~2011.3.31
（2001からUCC of WCM）

Mooney 先生が所属なさっていた PCUS とは，合衆国南部と境界諸州の Presbytarian Church in the United States のことで，1983年に北部組織と合同して，現在は Presbyterian Church (U.S.A.) となっている。先生以外は全て UCBWM の派遣であり，ルザレス先生がこの正式名をもつミッション・ボードから英文学科に派遣された最後の宣教師となられたわけである。

日米関係の変化，プロテスタント教会の社会的，国際的貢献の重点の推移など，様々な変化の結果，同志社大学において宣教師を教員としてお迎えすることの意味や必要性は，戦前や戦後数十年間と21世紀の今では違って当然であろう。中でも，キリスト教がその血となり肉となっている英米の文学・文化・言語を主たる教育・研究分野とする私たちの学科にとってはどうなのか。ルザレス先生がご退職された今こそ，改めて考える好機であろう。

先生の教育理念，信念，学生への姿勢はご自身のキリスト教の信仰に根ざしたものだと拝察する。英文学科で教鞭をとられた最初の年に「英作文III」のAdvanced Classで配布された手紙（1990年４月26日付け）には，先生のお考えがはっきり表現されている。先生はこのような手紙を毎週書かれて，学生からの自由な反応を奨励された。

> As a Christian I believe that there is a God-image in each one of us and that we will find our fulfillment in life only if that image, which embodies all that is good, is allowed to grow. Each person is unique and this uniqueness must be allowed to show so that it might be appreciated.
>
> So even only in this class, enjoy the freedom to be <u>you</u>. Cast aside fears and worries about what others might feel or think about you. Relate to each other and to me as a <u>person</u>—not as a Japanese who is expected to think and behave like a Japanese.

そして自分以外の人々のニーズと声に耳を傾け，自分の住む世界より大きな

世界に目を向けるよう，相対的思考と判断ができるようにと，学生達を訓練なさった。「外人」という差別用語が存在する日本の排他性，様々な形をとる枠を破って，心を外に開くことができるように指導なさったのである。これこそ国際主義教育ではなかろうか。

先生はいわば「外」から日本や英文学科を見て，疑問点，改良すべきだと思われる点を口にされた。内情に通じない人の意見は有効な意見にはなりにくい。土壌の質を知らずに苗を植えても，うまく育たない。しかし問題は,「現実の事情」なるものに対する私たちの態度であろう。何か変えようとすれば必ず壁にぶつかるものだが，その壁が実は生け垣でも石の壁だと思い込む傾向が，私たちにはないだろうか。そして内情を知っている者が物事をしっかり見ているとは限らない。当たり前のことだが，外から見て初めて見えてくるものは多い。これは日本で英文学科を標榜する私たちなら，日々実感していることである。この貴重な外の目線を中へと持ち込み，内の事情や考え方と揉み合わせて，初めて成長も可能になる。批判を受けると自己防衛の姿勢が本能的に出る。けれど, 不十分な現実認識に基づいた批判だということを，現状維持の正当化の口実に使うことだけはしたくない。

ルザレス先生をお送りする言葉というより，先生がこの英文学科にいらっしゃったということの証に少しでもなればと思い，このエッセイを書かせていただいた。悔やまれるのは，先生がもっておられる容量の大きい能力を英文学科が十分に活用できなかったのではないかということである。何も先生に限ったことではない。教員一人一人の能力と潜在力を，お互いにもっと知り合い認め合い，それを一層活かせるカリキュラムを工夫していきたいものだ。それは可能だと，先生ならおっしゃる筈である。